



一 スタート前

潮の香りがする。白い帆が遠くに見える。あれはヨットか。それじゃあ、その向こうに見えるのはフェリーか。島もいくつか浮いている。いや、島は浮かないか。ひよっこりひようたん島じゃないんだからな。

ひよっこりひようたん島？何年もの間、意識から遠のいていた名詞だ。今まで、どこに行っていたんだ。頭の隅から、急に、ひよっこり出てきた。ひようたんから、島だ。子どもの頃、テレビに齧りつくようにして観た。あらすじは覚えていない。観たということだけは覚えている。本当に観たのか。それは確かだ。テレビは白黒だったはずだ。だけど、記憶の島は、緑色の木が生え、茶色の土がむき出しになっている。その島が青い海をチャブチャブと、白い波を立たせながらスイスイと移動している。昔のことは覚えているのに、今の自分の居場所がわからない。変な話だ。自分もひよっこりひようたん島のように漂っているのか。いや、島は漂わない。さっきから同じことを繰り返しているな。

ここはどこだ。高い建物がいくつか建っている。バスもタクシーもいる。JRの駅もある。ホテルもある。じゃあ、ここはサンポートTだ。昔、ここで勤務していたことがあった。わずか二年間余りだ。やはり、昔のことは覚えている。不思議な話だ。でも、何の仕事だったか。それは覚えていない。不思議な話だ。

それにしても、どうしてこんなに人がいるんだ。今日は、盆か。正月か。それとも盆と正月が一緒に来たのか。そんなはずはない。それほど、俺はボケてはいない。よく見ると、ここにいる人は、みんな、マラソンのかっこうだ。走るのか。いいなあ。俺も昔、マラソン大会によく出たものだ。最近では、いつ、出場したのかなあ。確か、瀬戸内海の島を一周したことがあるぞ。四国の水がめと呼ばれる大きなダム周りも走ったことがあるぞ。季節外れの冬に、海水浴場の砂浜も走ったっけ。あの時は、砂に足が取られて、前に進まなかったなあ。このまま砂浜から出られず、砂の男になるんじゃないかと思ったものだ。そんなことはないか。

こうしてランナーたちの中にいると気持ちがいい。活気がある。走りたい気持ちになる。じゃあ、走ろうか。ひよっとしたら、俺はマラソン大会に出場に来たのか。それはわからない。覚えていない。俺なのに、俺が何をしたいのかわからない。スタートなのか、ゴールなのかわからない。まあ、いいか。どうにかなるさ。

さあ、体を温めるか。近藤はジョギングに向かおうとした。その時、バッグの中の携帯電話が鳴る。誰だろう。近藤は携帯電話を取り出す。母親だ。休みの日の早い時間になんだろう。

「健。お父さんがいないのよ」母親が早口でまくしたてる。

「いないって、散歩にでも行ってるんじゃないの」

近藤はこれから体を慣らそうとジョギングに行こうとしたのを妨げられたので、少し怒ったように言う。

「散歩はあたしと一緒にいるの。お父さんが認知症だと知っているでしょう」

ああ。そうだ。父は認知症だ。年齢はまだ六十歳を少し過ぎたぐらいだ。昔で言えばおじいさん

だけど、平均寿命が八十歳近くにもなった今では、六十歳なんて若い。人生はこれからだ。それなのに、父は認知症になった。定年退職前から、趣味の旅行や登山に、母親と一緒にいていた。まだ、まだ、ボケるわけにはいかないからな。足腰を鍛えないと。それが父の口癖だった。体を鍛えるために、毎朝、毎夕、近所を散歩していた。ある日のことだ。

「父さんが帰って来ないの」母親からの電話だった。近藤はベッドで眠っていた。その電話で目が覚めた。近藤は結婚し、別の世帯で生活していた。それでも実家からは車で五分もかからない。すぐ近くに住んでいた。

「散歩だろ。もうすぐ帰ってくるよ」と、言いながら時計を居る。夜中の十二時だ。散歩にしてはあまりにも遅い。

「わかったよ。すぐにそっちに行く」近藤は電話を切った。

「どうしたの」ふとんの中から妻が尋ねてきた。

「親父が帰ってこないそうさ」近藤はベッドから起き上がると、パジャマの上からウインドブレーカーをはおった。

「お父さんが？」妻はまだふとんの中だ。

「ああ。散歩に行ったまま帰って来ないそうさ」

「散歩の途中で、誰かと知り合い、飲みにも行ったんじゃない。ふあああ」妻はあくびをしながら寝がえりを打つ。

「そうだと思うけど。まあ、行って来るよ」

近藤は嫌な気がした。父はあまり酒を飲まない。家では缶ビールを二本飲む程度だ。その缶ビールを飲むと、すぐに畳に寝転がって寝てしまう。酒に弱いのだ。それに近所で酒を飲むなんて聞いたことがない。何かあったのか。事故か。不安なまま、車を実家に走らせる。家に着き、玄関を開けるとそこに父がいた。体中の服が泥だらけだった。

「今、さっき、警察の人が送り届けてくれたの。道路の水路の近くで座りこんでいたらしいわ」

「おお。健か」父の目はうつろだった。

「疲れた。さあ、寝るか」父は汚れた服で、靴を履いたまま家の中に入ろうとした。

「まずは靴を脱いで、着替えなきゃ」近藤は母と一緒に父親を寝まきに着替えさせた。父はその間、突っ立ったままだった。じっとしている。自分では何もしない。子供みたいだ。昔、自分がそうだった。着替えが済むと、ふとんに寝つかせた。すぐに、ゴーゴーといびきをかいて眠りについた。近藤と母は互いに困ったように見つめ合う。

「どうしよう。健」

「とにかく病院に行こう。俺、年休を取るから、一緒に行こう」

朝、近藤は母親と一緒に父親を連れて病院に行った。診断結果は思った通り、認知症だった。

「まだ、若いのに・・・」母は苦勞して手に入れた幸せが消えていくかのように、がっくりと肩を落とした。顔は俯いたままだ。

「大丈夫だよ。かあさん。早くに症状がわかったから、治療をしていけば、治ることはなくても、進行は遅らせられるよ」

「そうなら、いいけど。これから、楽しい人生を一緒に過ごせると思っていたのに・・・」

母の失望は大きい。その側では、大丈夫、大丈夫と寝言のように呟きながら、病院の待合室の長椅子に座っている父がいた。

その日以降、母と近藤とで父の病気に着き添った。特段、大きな問題は生じなかった。日常生活なら無事に過ごすことができた。今回が初めての大きな騒動だ。

「それがね、背広がないの。どうも背広を着て行っみたいなの。それに、テーブルの上にマラソン大会のチラシが置いてあったわ。ひよっとしたら、お父さん、マラソンに参加する気じゃないの。病気になるまで、その大会に出るんだって、走る練習をしていたのよ。病気がわかってからは走ることはやめたけど。あなたもその大会に出場するんでしょう？」

母が言ったマラソン大会はまさに今、近藤が走ろうとする大会だった。でも、父親は申し込んではいないはずだ。父親の無念を晴らすために大会に参加するわけではない。でも、心の奥底で、そんな気持ちがないわけでもなかった。自分が小さい頃から、家族旅行と称して、父親が参加するマラソン大会に家族で一緒に行ったものだ。

小豆島で行われるマラソン大会には、前日から島に渡り、観光地のクジャクやサルを観て宿泊し、翌日には、父親だけがマラソンに出場した。その間、手持無沙汰だった母親や健は、参加者等に振舞われる小豆島特産のそうめんを食べた。食べ放題だった。だが、健たちはそうめんを食べていることに夢中になり、父親がゴールする姿を見逃した。足を引きずりながら疲れ果てた様子の父親が自分たちの方に向かってくる。健たちは箸を持ったまま、器に入ったそうめんを啜っていた。父は少し怒っているように見えたが、完走した満足感からか、走ったままの姿で健たちの横で、同じようにそうめんを啜った。そうめんと水と氷が入れられた箱には、そうめんを食べた人たちの出汁がしたたり落ち、薄茶色に染まっていた。セピア色の懐かしい思い出だ。

「まさか？背広姿でマラソン？」

「でも、靴はいつものジョギングシューズを履いていったみたいなのよ」

背広にジョギングシューズ。アンバランスな姿だ。背広はランニングには適していない。それでも最近、目立つことを楽しむのか、着ぐるみを被ったり、キャラクターの姿に扮したランナーがマラソン大会に出場している。父も真似をしたのか。まさか。

「わかったよ。走りながら探してみるよ」

「あたしも沿道やゴールでお父さんを探すわ」

「いや。母さんは家にいてよ。父さんが、ひよっと戻ってくるかもしれないから。それに前みたいに警察から連絡があるかもしれないし」

母と近藤との役割が決まった。近藤は、本当なら、この大会で自己記録の更新を狙っていたが、その考えは捨てた。まずは父親を探すことが第一の目的だ。本当に、父が走るのかどうかはわからない。単に沿道で応援しているだけかもしれない。だが、父なら走るだろう。そんな気がした。

父から聞いた話だが、若い頃は本格的にマラソンに取り組んでいたらしい。本格的と言っても、週末ランナーだが、平日でも、昼休みのわずかの時間を活用して、仕事場の目の前の公園の中とか、仕事が終わった後、自宅から走ったり、定期的に、ランナー仲間たちと一緒に陸上競技場などで練習をしていたらしい。それが、自分が生まれて、仕事も忙しくなっからは、走らな

くなった。それが今頃、それも認知症になってから走るだなんて、どうかしている。しかも、背広姿。ある意味、父の人生は仕事とマラソンが生きがい、生活の軸、中心だったのかもしれない。仕事は定年退職したため生きがいから消え、代わりに、地下深く眠っていた、もうひとつの生きがいであるマラソンが噴火して、今、現れたのだ。

どこにいるんだろう。近藤はスタート地点をジョギングしながら辺りを見回す。参加人数は約一万人。この中から父を探し出すのは至難の業だ。いや、不可能だ。道路には人が溢れている。唯一救いなのは、父が背広姿であることだ。ランナーたちは、ランシャツにランパン、またはタイツ、女性はスカート姿だ。背広姿なら目立つから見つけれられる可能性はある。だが、人と人が重なれば見分けはつきにくい。

近藤はスタート地点の周辺をゆっくりと走る。ここは港がすぐそばで、海浜公園もある。赤灯台までの海沿いの公園やテントを張り受付をしている広場、すぐ隣に建っているシンボルタワー、国の合同庁舎、少し足を延ばして、JRの駅やバスターミナル、タクシー乗り場まで範囲を広げて、父を捜した。だが、やはり父は見つからなかった。背広姿にジョギングシューズで家を出たからといって、その背広の下には、ランシャツ、ランパンを見に着けていたかもしれない。背広を脱げば、他のランナーと一緒に姿になる。それでは見つかりにくい。

それに、父がマラソンに出場するとは限らない。たまたま、テーブルの上に、マラソン大会のチラシが置いてあっただけじゃないのだろうか。今頃、家の近所を散歩して、ただいま、腹が減った、と帰って来ているんじゃないだろうか。近藤はポケットから携帯電話を取り出した。画面を見る。着信の表示はない。やはり、まだ、父は家には帰っていないのか。

近藤はアップしているランナーだけでなく、その応援の家族や観客にもできるだけ注意を向けた。だが、父の姿を見つけることはできなかった。

そろそろ集合時間だ。このマラソン大会はスタートが早い。九時スタートだ。今は、八時十分。四十分前には集合だ。集合時間は、少し早いような気がするが、一万人も出場するのだから、ランナーを整列させるのに時間がかかる。運営も大変だろう。仕方がない。

また、スタート時間が九時と早いのは、スタート地点がJRや私鉄、バス、フェリーなどの交通の結節点だからだろう。できるだけ、公共交通機関の利用者に迷惑を掛けないようにしようという配慮なのだろう。それにしても、九時は少し早い。体はまだ眠っている。

地元の参加者ならばその日の早朝に自宅を出れば受付の最終時間の八時に間に合うが、県外など遠方からの参加者は前泊しないと難しい。そうか。最近のマラソン大会は、健康志向もあるが、ランナーと言う観光客を誘致するための観光戦略で開催される場合も多い。朝の九時がスタートならば、遠方のランナーは、泊まらざるを得ない。地元としては、このT市に多くの観光客等が来て、ホテルに宿泊し、土産を買い、飲食店で食事をして、お金を落とすことによって、街が賑わい、潤うのはありがたい話だ。

それに、朝九時スタートだと、サブスリーを目指しているランナーならば、昼過ぎにはゴールでき、午後からはゆっくりと休息できる。もちろん、膝や股関節が痛いとか、ふくらはぎが吊りそうとか、アキレス腱が切れそうとか、様々な後遺症はあるものの、翌日には仕事が控えているサラリーマンランナーにとっては、体を休ませる時間は少しでも長い方がいい。近藤にと

っても、スタート時間が早いマラソンは好都合であった。

自分のことはいい。それよりも、父を探さないと。アップでかいた汗をタオルでぬぐい、大会に出場用のランニングシャツとパンツに着替えると、近藤はスタート地点に向かった。ただし、今日の大会出場の目的は、サブスリーの記録更新ではなく、父を探すことだ。

俺は何で走っているんだろう。そうか。もうすぐ大会があるんだ。だから、練習しているんだ。練習？何のため？大会に出場するため。何の大会だっけ、ああ、そうだ。地元で開催される初めてのマラソン大会だ。それなら、出場しないといけないな。その大会、いつだっけ。

二 スタート地点

空が青い。さっきから空ばかり見ている。周りはランナーばかりだ。ランナーの頭や服装を見ても仕方がない。だけど、よかった。空が青いことに気がついた。普段、散歩をしても、家並みや車、自転車、歩行者、道路を見ることはあっても、空を見上げることはない。この群衆の中に入ったおかげだ。

「走って」誰かが俺の背中を押す。俺は仕方なく、前に走りはじめた。これは何キロの大会だ。制限時間はあるのだろうか。昔、マラソンを走ったことは思い出した。「フルマラソン、大丈夫かな」「大丈夫だよ。制限時間は六時間もあるんだから。疲れたら歩いてもいいんだよ。十分間に合うよ」

俺の隣で、見知らぬ男女が会話をしている。最近、誰もかれもが見知らぬ人になってきている。もちろん、この俺も見知らぬ人から見れば、見知らぬ人だろう。俺は何を言っているのだろうか。そうか、フルマラソンか。何年ぶりだ。いや、俺は、昔、本当にマラソンを走ったことがあるのだろうか。それさえも、最近、忘れてきた。どんどんとみんなが俺を追い抜いていく。同じく俺の記憶もどんどん俺を置いていく。記憶に置いてきぼりにされた俺は何物だ。空っぽの体。その体に、急に、負けたくないという気持ちが湧いてきた。誰に？何に？わからない。まあ、いいか。俺は俺を追い抜いたランナーの後に続いた。

青空だ。快晴だ。太陽がT市のシンボルの山の屋島の上にある。時間は朝八時五十五分。海風が心地よい。目の前は海だ。白い帆のヨットが海原を駆け抜けていく。マラソン大会を応援してくれているのか。島がくっきりと見える。瀬戸内海には多くの島がある。このスタート地点から目の前の島にフェリーが進んでいる。遠目だとマッチ箱大に見える。マッチ箱か。タバコを吸う山本だが、ライターは使ってもマッチを使うことはない。スーパーやコンビニでも、マッチを売っているのはあまり見かけない。マッチは死語だ。その死語じゃないけれど、目の前の島は、以前は千人近くが住んでいたらしいが、今は百四、五十人程度だ。それもほとんどが老人だ。平均年齢は六十歳を超え、七十歳に近い。

保育所、小学校は閉鎖中だ。島にいるわずかの子どもたちはフェリーで通学するしかない。その目の前の島の向こうにも島がある。二つの島は、女木島、男木島と呼ばれており、童話桃太郎に出てくる鬼の住処だったという伝説がある。その鬼の後継者たちも高齢化で、足腰が弱っており、とても鬼にはなれないだろう。

山本は時計で確認した。もうすぐピストルが鳴る。マラソンが始まる。山本は台の上に立った市長の横で、感慨深く、大勢のランナーを見つめていた。T市では初めてのフルマラソン大会だ。街おこしや観光客の誘致のために、全国各地で、都市型マラソンが開催されている。このT市においても、遅ればせながら、フルマラソン大会を開催することになった。十キロ程度のマラソン大会はT市の東端にある合併町で開催されているが、T市の中心部で、しかもフル、四十二。一九五キロのコースで開催される大会は初めてだ。ちょうど、古い陸上競技場を建て直して、新しくなったばかりだ。

このマラソン大会は、陸上競技場の新設を記念しての大会でもある。海を埋め立て、行政機関や市民ホール、飲食店街などを整備した、T市の、K県の交流拠点を出発地点とし、新たな陸上競技場をゴールとするコースだ。しかも、ランナーたちは、スタートして西に進み、市の西の端で折り返し、東に向きを変え、再び、このサンポートを通過し、東にある陸上競技場向かう。ランナーたちは、瀬戸内海を望みながら、海岸線を走る。別名、シーサイドマラソンだ。それがこのマラソンの売りだ。

山本はこのT市のスポーツ振興課長。歴代の課長の後を引き継ぎ、このマラソン大会の開催のために、言葉どおり東奔西走した。警察との協議、マラソンコース沿いの、自治会や店舗、バスや電車の公共交通機関の関係者などとの協議など、課題は至る所にあった。その一つ一つを解決し、ようやくこの日を迎えることができた。

バン。ピストルが秋空に鳴った。ランナーたちの塊がどよめく。参加者は一万人。大げさに言えば、地響きがする。先陣を切って飛び出すランナー。背中を押され、つんのめりながら走り出すランナー。人が多すぎて前に進めず、その場で足踏みをするランナー。様々だ。

そんな中で、山本は一人の男、そう、年の頃なら六十歳を過ぎている男性に気が付いた。出場しているランナーたちのほとんどがランニングシャツやランニングパンツ、タイツ姿なのに、その男だけ、靴はランニングシューズだが、服装は背広姿だ。それに、ゼッケンを付けているように見えない。参加費を払わずに出場しているのか。まさか。だが、考えられる。今回、第一回目のマラソン大会なので、応募者が殺到し、一か月もたたないうちに定員が満員となって出場者を締め切った。

スポーツ課に、締め切りが早いじゃないか、何とか参加させろと電話がかかってくる、メールが届いたりしたが、全て断った。山本はスポーツ振興課長ということで、その時だけの友人や知人からも何とか申し込みできないかと頼まれたが、全て断った。それでも走りたい人が多いことは知っていた。普通ならば、沿道でランナーと一緒に走ることはあるけれど、こうも大胆に、出場選手の中に紛れ込んで走る人は珍しい。いや、珍しいと言うよりも、そんな人はいないはずだ。間違いだろう。何度も背広姿のランナーを目で追い掛ける。

最近のマラソン大会は、タイムを狙うよりもファンランの人が多。記録よりも走ることが楽しみなのだ。パンダや犬などの着ぐるみを被ったり、アニメやヒーロー戦隊の主人公のコスチュームで走る人もいる。以前、山本が参加した大会では、背広姿にカバンを持って走っているランナーもいた。その類だろう。だが、得てして、そういう人は若い。その背広姿の参加者は、山本の目には六十歳過ぎに見える。そんな人が、洒落でコスチューム姿で走るのだろうか。山本が疑問に思ううちに、背広の男は大勢のランナーの中に紛れて見えなくなった。

「課長。最後のランナーが走り終わったら、ゴールに向かいましょう」係長の遠藤がランナーたちの動きを見ている。

「そうだな」山本も頷く。変なランナー一人に気を使うよりも、このマラソン大会を成功させることが先決だ。山本はすぐに頭を切り替えた。とにかく、事故なく、無事に終わってくれ。あのランナーも救急車だけには運ばれないことを願う。携帯の電話が鳴る。課長補佐の斎藤からだ。

「わかった。すぐそっちに行く」山本は公用車が止まっている駐車場へと向かう。市長を見送る

ためだ。駐車場に着くと、山本は随行している秘書課の職員とこの後の市長の日程を確認した。市長にマラソン大会の表彰式に出席してもらうためだ。

「ふう」山本は去っていく黒塗りの車から頭を上げた。やることは無数にある。ため息をついている暇はない。紙ベースのスケジュール表を一つひとつ確認し、黄色いマーカーで消していく。山本は最後の選手がスタート地点の線を越えるのを見届けると、背広姿のランナーのことはもうすっかり忘れて、ゴール地点の新しい競技場へと車で向かった。

マラソンが始まった。だが、父の姿は見当たらない。そりゃそうだ。主催者発表は一万人だ。一万人の中から探し出すのは至難の業だ。それに、父が走っているかどうかはわからない。どこかの沿道で眺めているだけかもしれない。ひょっとしたら、もう家に帰っているのではないか。近藤は携帯を見る。期待していたが、着信はない。それでも母に電話する。

「もしもし、俺だけど」「ああ、健。父さんいた?」「いないよと言うよりもわからないよ。まあ、とにかく、走りながらでも父さんを探してみるよ。母さんは家にいてよ。父さんがふらっと家に帰ってくるかもしれないし、警察か誰かに連れられて、家に帰ってくるかもしれないから。じゃあ。また、連絡するよ」「わかったわ」

近藤は携帯をランニングパンツのポケットにしまうと、走り出した。

大会は秋。今は、春だ。後、大会開催まで六か月だ。時間がありそうで時間はない。今回はフルマラソン。十キロや二十キロじゃない。四十二・一九五キロだ。計画的にかつ長期に渡って練習をしないと完走は難しい。だが、気が乗らない。地元で初めてのフルマラソン大会。念願のフルマラソン大会だ。

これまで、マラソンや長距離の大会に出場するために、市外や県外に出ていた。ようやく、市内で、フルマラソン大会が開催される。これに出場しないことには自分が歩んできた、いや走ってきたランニング人生に傷が付く。と、言いながら、膝が痛む。もう既に、体中は傷だらけだ。若いころに、マラソンや山登りで無理をした古傷が痛むのだ。こんな調子で参加したら完走は難しい。途中リタイアが関の山だ。

だが、折角の地元大会だ。出場するからには、タイムは置いておいて、リタイアだけはしたくない。それなら、練習するしかない。本来なら、月間三百キロを走らないといけませんが、それは若いころのこと。

今、六十歳を過ぎて、そんなことをしていたら、体がつぶれてしまう。体との会話をしながらも、せめて、月間百キロは走る必要がある。たかだか週二回、一回当たり十キロの練習だ。俺は日が沈むころを見計らい、Tシャツに短パン姿で、いつもの練習コースの東バイパスに向かった。